第45回岩手県PTA研究大会

宮古大会　報告書

大会テーマ

『つながろう！子どもたちの未来のために
～生きる力を育む地域の絆～』

期 日　令和5年12月9日（土）

主 催　一般社団法人岩手県PTA連合会

主 管　宮古地区PTA連絡協議会

目　次

ご　挨　拶……宮古大会実行委員長　四　垂　翔……2

開 催 要 項……3

全　体　会……4

記 念 講 演……１０

分 科 会 一 覧……１４

第１分科会「組織運営」……１６

【分科会テーマ】多様性と夢の実現を考えよう

～一人ひとりがつながり、輝く未来へ～

第２分科会「復興・防災教育」……１８

【分科会テーマ】地域・家庭・学校で考えるこれからの防災

第３分科会「家庭と学校教育」……２０

【分科会テーマ】生きる力、次世代へつなぐ

～岩泉・田野畑の未来を担う子ども達に向けて～

第４分科会「家庭教育」……２２

【分科会テーマ】子どもたちの未来を切り開く力を育む

大会役員名簿……２４

母親委員名簿……２５

実行委員名簿……２６

ご 挨 拶

宮古大会実行委員長

四　垂　　翔

第 45 回岩手県 PTA 研究大会宮古大会は、宮古市民文化会館をメイン会場として開催され、県内からおよそ 600 名のＰＴＡ会員及び関係者の皆様に参加をいただきました。

ご参加いただきましたご来賓の方々、本研究大会開催にあたり、多大なお力添えをいただきました関係機関の皆様方、そして、県内各地からご参加いただきましたＰＴＡ会員の皆様に対しまして、実行委員会を代表して感謝を申し上げます。

本大会は「つながろう！子どもたちの未来のために～生きる力を育む地域の絆～」をテーマに、目まぐるしく変化する社会情勢の中、未来を生きる子どもたちのために、学校、家庭、地域が強い絆で繋がっていくことを目指した企画が行われました。

アトラクションでは、国指定無形民俗文化財である「黒森神楽」の伝承に取り組む宮古市立山口小学校特設伝承部の皆さんに「御神楽」「七つ物」を力強い踊りで披露していただきました。

全体会の記念講演では、宮古市（旧新里村茂市）出身で童話作家の茂市久美子氏をお迎えし、「夢が広がる本の世界～読書でつながる親子の絆～」と題した貴重なご講演をいただきました。茂市氏は、「私に出来ることは本を届けて読んでもらうこと」と考え、沿岸６市町村のすべての小学校に新刊童話を寄贈し続けておられます。急激に発展したデジタルメディア等に影響を受けながら生活する現代の子どもたちに対する思いを拝聴し、ご参加いただきました皆様と子どもたちの成長や未来に対する思いを共有することができました。

分科会では、大会主題に基づき様々な「つながり」について、講演やパネルディスカッションが行われました。「心」「命」「生きる力」「多様性」等について、課題解決に向けた協議が行われ、参会者全員が考え、気付かされる素晴らしい機会になりました。

私たちが育むべきは、単なる知識だけでなく、人とのつながりや協力することの大切さを理解し共感できる心だと思います。地域の絆が深まることで、子どもたちは安心して成長でき、困難な状況にも立ち向かえる強さを持つことができると思っています。本研究大会の全体会や分科会での学びが、子育てにおける新たなアプローチの一つになれば幸いです。

コロナ禍に準備委員会を立ち上げ、大会主題や組織等について話し合いを持って参りました。初めは、宮古市をメイン会場に、山田・田野畑・岩泉をオンラインでつなぐ形で行う構想でした。しかし、コロナが収束し参集での開催が可能になったことから、今年度になり実行委員会で再度見直し、まさに急ピッチで準備を進め 12 月の本研究大会開催に至りました。

ご多用の中、実行委員、当日の係を快く担ってくださった宮古地区ＰＴＡ会員の皆様とご協力いただきました関係機関の皆様、ご参加いただきましたご来賓の皆様と県内各地区のＰＴＡ会員の皆様に心より感謝を申し上げ、本研究大会のご挨拶とさせていただきます。

第45回岩手県ＰＴＡ研究大会宮古大会　開催要項

1　趣　　旨　社会が大きく変化する中で、心豊かでたくましく生きる子どもたちのために、組織内のつながり、学校や地域とのつながり、未来へのつながりを大切にしながら進める、家庭教育やＰＴＡ活動についての研修を深めることを目的とする。
2　大会主題　「つながろう！子どもたちの未来のために～生きる力を育む地域の絆～」
3　主　　催　一般社団法人岩手県ＰＴＡ連合会
4　主　　管　宮古地区ＰＴＡ連絡協議会
5　共　　催　宮古市教育委員会　山田町教育委員会　岩泉町教育委員会　田野畑村教育委員会
6　後　　援　岩手県教育委員会　岩手県小学校長会　岩手県中学校長会　宮古地区校長会
　　岩手県小中学校副校長会　宮古地区小中学校副校長会　岩手県教職員組合
7　期　　日　令和５年 12 月９日（土）
8　日　　程

9:30　10:00　10:20　12:30　14:00　14:20　16:00

受　付	アトラクション	全 体 会	昼食移動	受　付	分 科 会	閉　会
宮古市民文化会館（大ホール）				各分科会会場		

9　会　　場
　≪全体会≫開会行事・記念講演（宮古市民文化会館　大ホール）
　≪分科会≫第１分科会「組織運営」(宮古市民文化会館　中ホール)
　　第２分科会「復興・防災教育」（宮古市地域創生センター　多目的ホール）
　　第３分科会「家庭と学校教育」（グリーンピア三陸みやこ　シープラザ潤鳳）
　　第４分科会「家庭教育」（宮古市民文化会館　大ホール）
10　参 加 者　県内のＰＴＡ会員及び関係者　　５００名
11　参 加 費　一名あたり3,000円（ご希望の方には、８００円で弁当を斡旋します）

全 体 会 次 第

【全体進行】 高 橋 裕 二
（岩手めんこいテレビアナウンサー：宮古市出身）

1　アトラクション　『黒森神楽』 宮古市立山口小学校　特設伝承部
2　開 会 行 事　（1）開会のことば
　　（2）国歌斉唱
　　（3）主催者挨拶
　　（4）来賓祝辞
　　（5）歓迎のことば
　　（6）来賓紹介
　　（7）祝電披露
　　（8）ＰＴＡの歌
3　記 念 講 演　『夢が広がる本の世界　～読書でつながる親子の絆～』
　　童話作家　　茂　市　久美子　氏
4　閉 会 行 事　（1）次期開催地代表挨拶
　　（2）万歳三唱
　　（3）閉会のことば

大会テーマ

「つながろう！子どもたちの未来のために」
～生きる力を育む地域の絆～

全体会会場：宮古市民文化会館

アトラクション

黒森神楽（くろもりかぐら）

宮古市立山口小学校
特設伝承部

「黒森神楽」は６００年以上前から各地を巡行し、その貴重な習俗を現在まで継続していることから平成１８年に国の重要無形民族文化財に指定されました。
本大会では、山口小学校特設伝承部の児童の皆さんが「七つ物」「御神楽（みかぐら）」を披露しました。

全体会＜開会行事＞

【主催者挨拶】
岩手県ＰＴＡ連合会　会長　山 下 泰 幸

【主催者挨拶】
宮古大会実行委員会　委員長　四 垂　翔

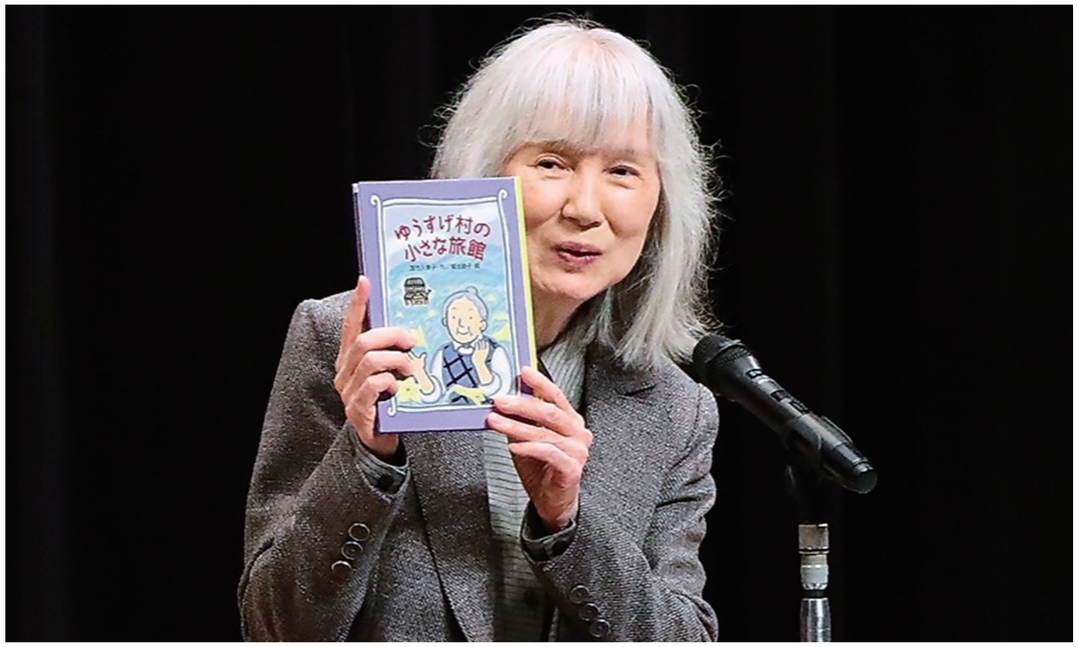
【来賓祝辞】
宮古市　副市長　桐 田 教 男　様

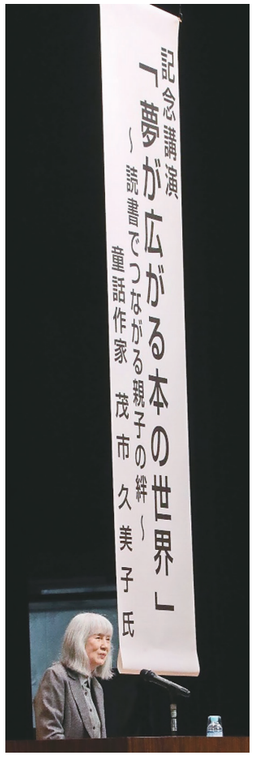
【来賓祝辞】
岩手県教育委員会　生涯学習文化財課
総括課長　小 澤 則 幸　様

【歓迎のことば】
山田町教育委員会　教育長　松 葉　覚

記念講演
「夢が広がる本の世界～読書でつながる親子の絆～」

童話作家　茂市　久美子　氏





＜閉会行事＞

記念講演

「夢が広がる本の世界」
～読書でつながる親子の絆～

講師：茂市　久美子　氏

◆はじめに

コロナ期間中、講演機会は全くなく、久しぶりだ。コロナ前、千葉で３時間の講演をして以来となる。久しぶりに会った方は、髪の毛が白くて驚かれたと思うが、以前は染めていた。ウクライナ侵攻以来、染めるのをやめた。「私の黒髪を捧げるから､早く平和が戻るように」との願いを込めて。

◆少女時代

小学校高学年の頃から童話作家になりたいという夢があった。いつも枕元に置く童話があった。今日いらしている方は４０代の方が多いと聞いているが、『アーサーおじさんのベッドタイムストーリーズ』という本がお気に入りだった。

子どもの頃、死んだらどうなるのか、このまま暗闇なのかと考えると恐怖を感じた。そんな時、学校に来たシスターから天国の絵を見せてもらい、明るい光が差し込み、夜の恐さ、闇の恐さが消えた。寝る前に、本の中の一話を読んで寝るとぐっすり眠れた。

母が旅館を営んでおり、父が読んでくれた。また、即興でお話を聞かせてくれた。いつも、お話を聞いて眠りについた。自分で本が読めるようになると、枕元に置いて読んだ。

母は､シスターが来る度に兄と姉にも本を買った｡自分の気に入った本を読むことがルーティーンになった。その習慣が残り、今でも、どんなに遅くなっても、１ページでも２ページでも本を読む。今は、「タイパ」とかいって、端折って読む人もいると聞くが、私は、幼い頃からぶれずに、読書習慣が続いている。

◆子どもにマジックをかけられる先生

中学高校時代には童話を書いていたが、作文や読書感想文は大の苦手。だから、作文や読書感想文の全国コンクール入賞作品を読むと、その表現力の高さに驚く。

『ゆうすげ村の紙すき屋さん』は東京書籍の教科書に載っているため、感想文が沢山送られてくる。こんなことを言っては何だが、クラスによって全く違う。子ども達の文章を通して、この先生は作文指導が苦手なんだな、このクラスの先生は上手なんだなとわかる。教師の力だ。子どもにマジックをかけられる先生がいる。子ども達の文章を読んでいると、とても楽しい。書いた子どもの姿、人間関係やクラスの様子も伝わってくる｡それほど表現豊かに文章を書けるように指導する先生に教えられた子ども達は幸せだ。

◆那須辰造先生

童話は、ファンタジーと生活童話に分かれるが、私は専らファンタジー。

大学は英文科に進学した。それは、原書で読めたらいいと思ったから。幼い頃、学校での一番の楽しみは、先生が本を読んでくれることだった。家に童話や全集が沢山あった。先生が読んでくれた本もあり、自分で読むと表現が違うことに気づき、なぜだろうと思った。今なら翻訳者が違うからだと分かるが、当時は疑問に思い、原書で読みたいと思うようになった。

大学時代、児童文学研究会に所属した。那須辰造先生との出会いが大きく影響した。先生から、まずは自分の創作を考え、そのあと翻訳のことを考えなさいと助言された。先生の勧めで、同人誌に原稿を書いた。書いたものを見せると、先生が褒めてくださり、書き直すと、また褒めてくださった。書く度に文章は良くなることが分かった。今でも推敲はよくする。

◆銀行勤務から出版社勤務へ

出版社への就職を目指したが、銀行に就職することになった。だが、就いた仕事は苦痛だった。失敗も度々した。３００万の手形を指示されたのに３０００万入れてしまい、大変なことになったこともある。

銀行は１年で辞めることになったが、支店長の紹介で講談社に入ることになった。経理部に配属され、作家への支払い等を担当した。印税は通常１０％だが、売れっ子は＋αがある。印税の前払いをお願いされることもあり、経理部ではあったが、それはそれで楽しかった。美術館に写真を借りに行ったりする機会もあり、よく、上野の美術館巡りをした。

◆ヒマラヤへ

大学時代山岳部に所属していた。当時の先輩の繋がりで、山岳写真家の藤田弘基と出会った。ブルーポピーの写真を撮るためヒマラヤに行くという彼に、「一緒に連れて行くよ」と言われた。

講談社を辞め、青いケシを見るためヒマラヤに行くことを決意した。空に近いところに住んでいる人達に昔話を聞きたいと考えた。ヒマラヤ行きや物書きになることには、兄も親も大反対だったが、姉は応援してくれた。１９７７年ヒマラヤへ渡り、１２月３１日に帰国した。

ヒマラヤの登山ガイドを表す「シェルパ」は、もともと少数民族の名前で、チベット語で「東の人」という意味。日本では、昔話を語るのはおばあさんだが、ネパールでは、男性が語り部として昔話を語る文化がある。

現地の英語が堪能な方を雇い、カセットテープで収録したものを英訳してもらった。最初の年は２０話も集められなかった。現地に伝わる昔話を集めながら、標高５０００Ｍの山から山へという体験をした。

◆作家としての歩み

帰国後、慌ただしく夜汽車に乗って帰郷したら、実家に某新聞社の記者が来ていた。数日後、写真入りで、茂市が年内に本を出すという記事になっていた。火のない処にも煙が立ってしまった。加えて、「いつ本が出ますか」という電話が実家にかかってくるようになった。

藤田に同行して、再びヒマラヤを訪ねた。今度は８０話ほど集めた。山からホテルに帰ると、母からの手紙の束があった。物書きになりたいと言い、許してもらってきた以上、やるしかなかった。今の私があるのは、母のおかげであり、そして、今となっては、あの某新聞記者にも感謝している。

帰国後、山系の原稿を書く機会もあり、藤田の写真集のキャプションを書いたりした。そうした中で、藤田が実業之日本社へ原稿を持ち込んだ。その時、たまたま訪れていた白水社の編集者の目に留まり、『ヒマラヤの民話を訪ねて』（白水社）として出版されることになった。

編集者が作家を育てるというが、私もよい編集者に育ててもらった。書き始めてから出版されるまで１０年かかった作品もある。本が売れ始めると、出版社から声がかかるようになった。

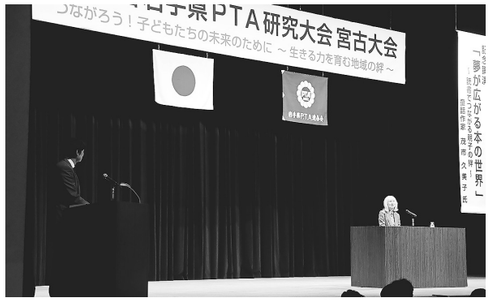
今年７２歳になるが、４０代の頃は、自分が７０歳で書いているとは想像していなかった。だが、大震災の時は書けなくなった。夫の死も重なり、スランプに陥った。でも、原稿の締め切りがあり、書かなければならなかった。書いている時は没頭できた。書くことで、早めに立ち直ることができたのかもしれない。今度ヒマラヤの昔話が絵本になる。昔集めたものが、今世に出る。長生きして良かったと思う。

目標をもつと、目には見えないもの、守護霊のようなものが助けてくれる。いろいろ引き寄せてくれる。子ども達にも、あなた達を守ってくれている存在があること、一人じゃないということを伝えたい。そして、大人もまず本を好きになってほしい。小説でも、童話でもお子さんと一緒に読んでほしい。

【質疑応答】

会場から（四垂）：子どもが二人いる。３年生の息子と一緒に読書感想文に取り組んだ。現代社会はネットが普及し、良くも悪くも子ども達に様々な影響を与えていると思うが、親や教職員に大切にしてほしいことは？

茂市：三つの大事なものがある。それは、才能、努力、運。いじめ等の問題もあるが、人として、思いやりや感謝の気持ちをもてるか。ひとりひとりをそれぞれの守護霊が守っている。神様が見ていてくださる。だから、誰も見ていないからやってもいいとはならない。あの世に行って、また生まれ変わるかもしれない。人は、自分の好きなこと、これなら人に負けないということを努力する。努力は人を裏切らない。運の神様も見放さない。



高橋：子どもにマジックをかけられる先生という話があったが。

茂市：先生だけじゃない、親もマジックをかけられる。それは、つまり、あなたをどれだけ愛しているかということ。本についても、自分が読んでいいと思ったものは、子どもにも伝わる。まずは自分が読んで感動したものを読んで聞かせてほしい。

高橋：ストーリーとは？

茂市：私の作品には何かのヒントがある。お話の種、ヒントがあると、家の枠組みができる。あとは、そこに誰を住まわせ、どう動かすか。お話を考えるのにさほど苦労はない。

高橋：沿岸地区の子ども達に本を寄贈しているが、どのような想いからか？

茂市：私にできることは、本を届けて読んでもらうこと。本が届いた後に手紙を書かせる等のお気遣いは不要。読んでもらえたら嬉しい。

高橋：岩手で好きな食べ物は？

茂市：お米が大好き。ひっつみ汁も大好き。煮干しの出汁のラーメンも好き。

高橋：作品を通して子ども達に伝えたいことは？

茂市：作家は皆自分の好きなことを書いている。教訓めいたものを書いてはいない。年配の方からも愛読者カードが届く。そこには、「慰められました」とあった。絵本は子どものためだけではない。子育てに疲れている方には絵本を勧めたい。親子で一緒に読んで、ほっこりしてもらえたらいい。

会場から（佐藤）：ＰＴＡ会長１０年目。泣いた赤鬼の青鬼の精神で務めている。

茂市：青鬼が好きな方、宮沢賢治が好きな先生、私も大好きだ。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇ 分　科　会　一　覧 ◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

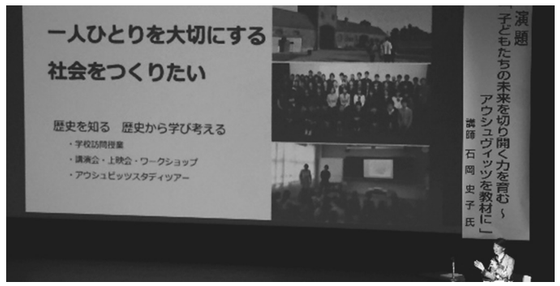
分科会	分科会テーマ	基調講演者・コーディネーター・パネリスト等
第１分科会 心をつなぐ 「組織運営」	「多様性と夢の実現を 考えよう」 ～一人ひとりが つながり、 輝く未来へ～	基調講演　講師 リアス環境管理株式会社　代表取締役　及　川　　元 NPO 法人みやっこベース　理事長　早　川　　輝 コーディネーター　花輪小学校副校長　熊　谷　大　輔
第２分科会 命のつながり 「復興・ 防災教育」	「地域・家庭・学校で 考えるこれからの防災」	コーディネーター　宮古市教育委員会　学校教育課長 小松山　浩　樹 パネリスト　兵庫県立大学大学院　減災復興政策研究所　教授 富　永　良　喜 岩手県立図書館　館長 森　本　晋　也 震災語り部・山田小学校ＰＴＡ会長 昆　　尚　人 岩手県地域防災サポーター 塚　本　清　孝 うのすまいトモス事務局・いのちをつなぐ未来館ガイド 川　崎　杏　樹
第３分科会 生きる力、 次世代へつなぐ 「家庭と学校教育」	「生きる力、 次世代へつなぐ ～岩泉・田野畑の未来を 担う子ども達に向けて～」	基調講演講師・コーディネーター 岩泉ホールディングス株式会社 代表取締役社長　山　下　欽　也 パネリスト　しだれ食品　社員　四　垂　克　貴 横屋建設株式会社　取締役専務　工　藤　大　三 ワサビ農家　吉　澤　　誠 岩泉町役場　町民課　総括室長　今　村　　篤 パティスリーフィエルテ代表　髙　橋　奈々美
第４分科会 多様なつながり、 子どもたちの 未来を切り開く 「家庭教育」	「子どもたちの 未来を切り開く 力を育む」	基調講演 講師　翻訳家・教育者　石　岡　史　子

各分科会の様子

第１分科会「組織運営」

第２分科会「復興・防災教育」

第３分科会「家庭と学校教育」



第４分科会「家庭教育」

第１分科会　心をつなぐ「組織運営」

分科会テーマ

「多様性と夢の実現を考えよう　～一人ひとりがつながり、輝く未来へ～」

分科会の視点

近年、メディアやＳＮＳが普及し生活の中の当たり前のツールになっています。また、ＡＩが発達し、様々な分野に取り入れられるなど、子ども達を取り巻く環境は日々変化しています。

時代が変わる中で、どんな時代でも大切なもの、それは「つながり」です。今こそ、人間関係のあり方やつながりの大切さを見直し、一人ひとりがつながりの中で輝いていける社会について考えてみませんか？

本分科会では「つながり」を大切にし、地域でご活躍なさっているお二人のお話を伺います。地域づくりや多様な人々との関わり方についてのヒントをもらいながら、どんな人でも輝き、夢の実現に向けて生き生きと活躍できる社会について考えていきます。

基 調 講 演

講師　リアス環境管理株式会社　代表取締役　　及川　元　氏

ＮＰＯ法人みやっこベース　理事長　　早川　輝　氏

講 演 概 要

「働く人に優しい雇用で追及する　本当の安心と快適」 講師：及川　元　氏

ビルメンテナンスや廃棄物処理をてがけるリアス環境管理株式会社、代表取締役を務める中で、高齢者、障がいをおもちの方、ニートや引きこもりの方々を積極的に雇用している。

○「つながる」ことは無理のないこと

つながることは大切なことだが、そこに無理があってはいけない。そして、フェアに接することで、自然で無理のないつながりを生んでいく。

○「組織経営者」としての大事な心構え

気遣い、細やかな心配りは組織経営において、とても大切なこと。そして、自分の思い通りに進まなかった時でも、「許す」気持ちをもって接する。人はウィークポイントの塊である。相手の弱さを隠してあげること、それも人とのつながりの中では必要なことである。

【第１分科会　講演の様子】

○「若い世代が輝ける」宮古に

20 代、30 代が生き生きと過ごすことで、それを見ている 10 代もあこがれをもつ。企業人としても、若い世代に経験を積ませたいと考えている。

「子ども達の夢を育む地域のあり方」 講師：早川　輝　氏

震災時には宮古の復興支援にあたり、その後 NPO 法人を立ち上げた。若い世代の居場所づくりを軸に、地域づくりや地域ぐるみでの活動に携わってきた。

○「つながる」ことは可能性が広がること

人とつながることは、その人の可能性を広げたり、選択肢を広げたりする。「望む未来を自らつくる」ためのよいつながりを生むお手伝いをしていきたい。

○「組織運営者」としての大事な心構え

それぞれ様々なバックグラウンドを抱えている。正解はいろいろある。受容の気持ちは忘れずに過ごしている。

【トークセッション　左：及川氏　右：早川氏】

○「宮古で育つ子どもが自分らしく」過ごせる街に

様々な人に触れ、様々な価値観に触れてほしい。それは財産。それぞれの可能性を伸ばしてってほしい。

感想（重茂中学校PTA会長　姉石誠司）

時代を超え、今も昔も変わらぬ、人と人、人と地域の「つながり」について改めて考えるとても良い機会となりました。

及川さんのお話からは、多様性の尊重について学びました。人はそれぞれ、性格も異なり、様々な事情を抱えています。及川さんのように明るく、広い心をもって接することが多様性の尊重の第一歩なのだと感じました。

早川さんのお話からは、未来の宮古市はとても明るいという希望を感じ、改めて宮古はいい街だなあという気持ちになりました。

私たちは、今、子育て中です。その子どもたちや若者たちが生き生きと関わる、well-being な宮古市を願い、私たち PTA もつながっていければという思いです。

ま と め

年齢、性別、住んでいる地域や家庭環境…人はみんな違います。どんな人でも生き生きと夢の実現を目指す社会はとても素敵なものです。家庭、学校そして地域の方々が「つながり」を深め、未来を担う子ども達を支えていきたい。そんな気持ちになるお二人の講演でした。

つながりとは、「無理のないもの」そして「可能性を広げるもの」というお二人のお話は、参会者の心に残るものでした。

第２分科会　命のつながり「復興・防災教育」

分科会テーマ

「地域・家庭・学校で考えるこれからの防災」

分科会の視点

東日本大震災以降、日本各地で地震や台風、集中豪雨、感染症などの様々な災害が起こり、多くの地域が被害を受け、その度に対応を余儀なくされてきた。東日本大震災を経験し、復興・防災に様々な立場から取り組んできたパネリストの皆様と共に、これからの防災教育の在り方や、災害等への備えとして地域・家庭・学校にできる事について考えていく機会にする。

コーディネーター・パネリスト

コーディネーター	宮古市教育委員会　学校教育課長	小松山　浩　樹　氏
パネリスト	兵庫県立大学大学院　減災復興政策研究所　教授	富　永　良　喜　氏
	岩手県立図書館　　館長	森　本　晋　也　氏
	震災語り部・山田小学校ＰＴＡ会長	昆　　尚　人　氏
	岩手県地域防災サポーター	塚　本　清　孝　氏
	うのすまいトモス事務局・いのちをつなぐ未来館職員	川　崎　杏　樹　氏

パネルディスカッション

（小松山）参会者の皆様、岩手には復興教育のプログラムがあること。また、「いきる、かかわる、そなえる」という副読本があるのはご存じか。本日は、復興教育とか防災教育、地域の安全を担う子ども達の人づくりにどのような手助けが必要なのか、ＰＴＡとしてどういうことができるのかということを確認できればと思う。

効果を発揮した避難訓練

（森　本）震災後、釜石東中学校で震災前に取り組んできた避難訓練が印象に残っていたわけについて聞き取り調査した。結果、３つ重要なことがわかった。１つ目は課題意識。他人事ではなく自分事だったというもの。２つ目は体験的で子ども達が主体的に取り組んでいたこと。３つ目の大きな柱が、家庭や地域と連携していたということであった。

人材育成の課題

（塚　本）あと 10 年も防災アドバイザーをできる気がしない。ワークショップができる方を育てたいと考えている。地域防災サポーターは高齢化している。

（川　崎）人材育成は大きな課題となっている。施設自体も正直大きな施設でもなく、市の指定管理で運営をしている。簡単に人を増やせない現状がある。

（　昆　）山田の子どもは、まず山田のことや自分達の住んでいるところのことを知らないと先に行けないという思いがある。もっと山田のことを震災も含めて勉強してほしい。

（冨　永）震災を実際に体験した人の生の声を聞くということが、経験していない人にとっては、大きな体験になる。また、震災を経験していない人でも被災地を訪問するということも大きな力になる。

（小松山）自分の住んでいる地域で体験していることや、体験しながら気づいたことをもとに土台を作り、それを広げていくというようなことが必要だということである。

これからの防災教育

（森　本）学校保健安全法では、地域の多様な主体と密接に連携・協働し、子どもの視点を入れた安全を進めるとなっている。命を守るのはその通りだが、児童生徒の主体性や社会性は地域を知ることで、郷土愛とか地域を担っていこうという意識にも繋がる。学校と家庭地域が連携することで地域の防災力を高める効果もある。まさに地域総がかりで取り組むことが必要である。

（森　本）熟議という言葉がある。何を取り組むというところから、みんなで話し合う。子どもの課題は保護者の課題でもある。ある意味、保護者の課題ということは、大人の課題であり、地域の課題でもある。みんな総ぐるみになって考えるというのがヒントになるのではないかと考える。

（冨　永）被災地での避難訓練や防災教育の活動は、それが辛い記憶を呼び覚ますトリガーになる。自分のペースで、少しずつチャレンジする方が心の健康にいいので、訓練の前に避難路を散策するなどの機会を持つことが、心のケアやサポートになる。心のサポートと防災教育をセットで行っている岩手県の知恵を全国や世界に伝えて欲しいと思う。

まとめ（小松山コーディネーター）

教訓を語り継ぐための方法として、子どもと学校と地域とが連携して学びを深めていく、その時には心配なお子さんはいないかなど、配慮をしっかりしながら進めるということ。伝承施設をうまく活用しながら、学ぶだけではなく、学校と地域をつなぐ拠点として活用していただくことも、提案をしていただいた。さらに、人材育成は学校での復興教育、防災教育自体が人材育成になっている。子ども達を育てることが今後の人材育成にもつながると思う。

感想（豊間根小学校ＰＴＡ会長　阿部智幸）

限られた時間の中で、とても充実した話し合いが行われた。２人の息子を持つ親として、大変興味深く聞かせていただいた。学校で訓練や学習はやっていても、家庭では残念ながら話題にのぼらない。震災を体験した者として、息子に少しでも災害に対して気づきを与えられるよう、まず家庭で防災を意識していければと思う。ご来場の皆様も、本日の学びをご家庭や地域に持ち帰っていただき、子ども達や地域のために活かしていただければと思う。

第３分科会　生きる力、次世代へつなぐ「家庭と学校教育」

分科会テーマ

「生きる力、次世代へつなぐ
～岩泉・田野畑の未来を担う子ども達に向けて～」

分科会の視点

講演では、数々の苦難を乗り越え成長を続ける企業のリーダーの経営理念と地元産業の振興や人づくりに対する思いから学ぶ。

パネルディスカッションでは、地元に根差し活躍されているパネリストの方々の思いや願いに触れながら、子ども達が郷土を愛し郷土に思いを寄せるようになるために、子育てで大切なことや大人の役割について考える。

基調講演

講師　岩泉ホールディングス株式会社　代表取締役社長　山下　欽也　氏

講演内容

- これまで多くの困難があったが、岩泉町民をはじめとする岩泉乳業応援隊に支えられた。少しでも多くの人に岩泉乳業の名前を知ってもらい、岩泉ヨーグルトの味を知ってもらうため、様々な発信を試みた。メディア効果をフルに活用して発信している。
- アスリートを育てる母親対象のトークショーの開催や岩手ゆかりのアスリート支援を通して、支えてくださる皆様に恩返しをするとともに、企業価値を高めたい。
- 地域の酪農振興のために岩泉町に、そして、配合飼料の高騰等により経営が圧迫されている町内の酪農家に寄付を行った。地方の乳業メーカーと地域の酪農家は両輪である。
- １次産業では５億円だが、２次・３次産業の付加価値１５億円が加わると、町における経済効果は２０億円になる。６次産業化により、所得向上、雇用の創出、地域活性化が図られる。これからも、高付加価値のある商品を作り続ける。魅力ある製品作りは魅力ある地域づくりに通ずる。そして、社員を育て、人づくりを進めていきたい。

コーディネーター・パネリスト

コーディネーター	岩泉ホールディングス株式会社　代表取締役社長	山下　欽也　氏
パネリスト	四垂豆富店　社員	四垂　克貴　氏
	横屋建設株式会社　取締役専務	工藤　大三　氏
	ワサビ農家	吉澤　誠　氏
	岩泉町役場　職員	今村　篤　氏
	パティスリーフィエルテ　代表	髙橋　奈々美　氏

パネルディスカッション

（山下）パネルディスカッションでは、地元に根差して活躍する方々と、子育てについて、また未来の子ども達に寄せる思い等を聞いていきたい。まずはパネリストの自己紹介から。

（四垂）岩泉町小川地区で豆腐屋を経営。中２と小３の子どもがいる。県外で働いていたが、現在は両親と豆腐店を営んでいる。以前は５軒あった豆腐屋も昨年末、１軒のみになった。炭鉱ホルモンや煮しめ等、食文化には豆腐は必須。父の代で終わらせることなく、次の代につなげたい。

（工藤）岩泉町在住。２歳と先月生まれた子どもがいる。兄も建設業だが、兄の姿を見ておもしろそうだと感じ、自分もこの道へ入った。実際、建設業はおもしろい。暮らしの「当たり前」を守るために、社会に必要な物を作るのが建設業だ。

（吉澤）畑ワサビ農家。中２の子どもがいる。脱サラして新規就農した。何かを生産することが、商売・経済活動の原点だと考える。畑ワサビの生産は岩泉が日本一だが、この日本一を継続したい。基幹産業の農業を通じて雇用を生み出し、地域に貢献したい。

（今村）役場町民課勤務。林業関係が長かった。４人の子がいるが、三男が高３になり、子育ても終盤。岩泉に移住して２３年、子育てをする環境としてはとても恵まれていると感じる。役場職員として知った地域の魅力を伝えていきたい。

（髙橋）パティスリーフィエルテを経営。フィエルテはフランス語で「誇り・プライド」という意味。４歳の子がいる。田野畑には美しい景色やおいしい食材がたくさんある。他地域に出て、もっと地元の人に自信をもってほしいと感じた。これから、田野畑や岩手、お客様のことを思いながら、おいしいお菓子作りをしたい。自分が幼い時にケーキやお菓子に抱いた特別感やワクワク感を子ども達にも感じてほしい。

（山下）誇りや自信をもっている人は魅力的。こういう人達とビジネスができたら楽しいだろう。次は、子育てについて、ご意見を伺いたい。地元で働きたい、離れていても地域のことを思う子どもに育てるにはどうしたらよいか、考えていきたい。

（四垂）岩泉町は自然とそこから育まれる食材に恵まれている。そうした中での家族の時間や食事を通して帰属意識を高めたい。皆、盆正月には楽しい思い出があるはず。人が集まれば、けんちん汁や煮しめ等が必ず出る。家族と一緒に食べた味を思い出し、自分で作って食べたい、作れなければ地元に帰って食べようかと考えるもの。地域ならではの食の素晴らしさを体験させられるのは岩泉のよさだ。

（工藤）今の子ども達はテレビゲームやスマホゲームをやり過ぎではないか。田舎に住んでいるのに、デジタルに夢中になるのはもったいない。ゲームはもっと後からでもいい。自分は自然の中で遊んだ思い出が強く心に残っている。今しかできないことを大事にしたい。

（今村）かっこいい大人がいっぱいいたら子どもは地域に残ると思う。大人達、先生も含めて、大人がキラキラしていれば子どもは地域に残るはず。

（吉澤）先祖へ向ける思い、祖父母への敬愛が大事。地域に住んでいると、歴史認識が重要。相手の立場を思いやれるような思いやりや知恵を育んでほしい。

（髙橋）祖母からひゅうずやひっつみ、まんじゅうを作ってもらった。就職等で家を出た時、楽しいことばかりではないはず。そんな時、おばあちゃんが作ってくれた○○を食べたい、友達と一緒に行ったあのお店の○○、そういうものが故郷への思いに繋がる。洋菓子店の経営を通して、人が集う場所づくりと、おいしいという感動を子ども達に伝えていきたい。

（山下）食の力は大きい。子ども達が五感で感じた記憶はずっと残る。インターネットの発達により、仕事はどこでもできるし、何でも買える。だが、この地に住んでいることの価値がある。本物の鮮やかさは地元でしか味わえない。今村さんに、地元の子ども達にどう育ってほしいか伺いたい。

（今村）緩やかな子ども達のチャレンジを支援するようであってほしい。今の子は失敗を恐れる。部活動の外部コーチをしているが、チャレンジできない子が多い。子どもは危ういから、大人達は危険を先回りして取り除く。しかし、子どもがチャレンジする機会を奪ってはいないか。小さなチャレンジができるということは環境に恵まれているということ、それが地域に愛着をもつということにつながるのではないか。

まとめ（山下コーディネーター）

（山下）まとめとして、企業としての役割、大人としての役割についてお話しする。企業としての役割は、地域経済の活性化と地域資源の価値を最大化すること。また、人を育てることは、学校・地域・家庭・企業に共通するもの。大人の役割は、地域のよさを知り子どもとともに楽しむこと。そして、学校行事や伝統文化の継承活動等に積極的に参加してほしい。何よりも、大人の楽しそうな姿を子どもに見せることが大切。楽しい思い出があるところに人は必ず帰ってくる。

第４分科会
多様なつながり、子どもたちの未来を切り開く「家庭教育」

分科会テーマ

「子どもたちの未来を切り開く力を育む」

分科会の視点

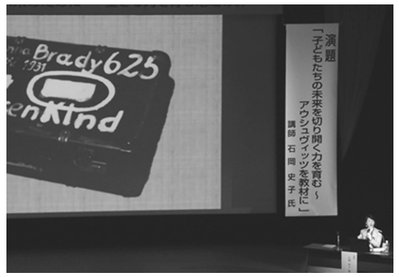
　昨年から続くロシアによるウクライナ侵攻に始まった戦争、そして激しさを増していくイスラエルとハマスの戦争のなかで、多くの子どもたちが犠牲となっている。世界が混沌としている今、命の大切さや人間の尊厳について、私たちはどのように向き合っていけば良いのか。子どもたちが自らの力で未来を切り開いていくことができるように、「問う力」を育むことについて考える。

　第二次世界大戦時のヨーロッパで、暴力や飢えの苦しみなど極限の状況に追い込まれながら、最後まで子どもたちに学ぶ機会を与えようとした「教師たち」と子どもたちがいた。歴史のなかに、今を生きる手がかりを見つけていく。

基 調 講 演

講師　翻訳家・教育者　石　岡　史　子　氏

講 演 概 要



1　アイスブレイク

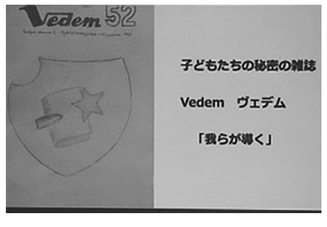
〇アウシュヴィッツ収容所の様子（鞄の写真）
　　→どんな「問い」が湧いてくるか。
・鞄の写真から様々な問いをもち、失われた命に思いを馳せる。
・ハンナという少女はどんな子だったのか。
　→１３歳の時にアウシュヴィッツ収容所で亡くなった。
・子どもの中から生まれる「問い」の力、自分で問いをつくる力が大切である。
・虐殺はある日突然起こるわけではない。そこまでの段階がある。
・先入観に基づく行為→偏見に基づく行為→差別行為→暴力行為→ジェノサイド
・どんな「問い」が生まれてくるか。
　→例）先入観が偏見に変わる時とは、どんな時なのか。
・イラストから、どんな「問い」が生まれてくるか。（平等と公正の違い）

〇実際に問いをつくってみる。（ワークシート）
　題材：「戦争の責任は、偉い人たちや政治家、資本家だけにあるのではありません。
　　そうなんです、責任は名もない一般の人たちにもあるのです。」
　　※アンネ・フランクの言葉
・参加者が、「問い」をつくり、１つだけ、私（自分）にとって「重要な問い」を選ぶ。
・ＱＲコードを読み取り、自分の問いを投稿する。→共感する問いに「いいね」ボタン
　→最も「いいね」が多い「問い」はどれか。→「なぜ一般の人にも責任があるのか？」

〇問いづくり：アメリカの市民運動で生まれ、企業や人材育成等で活用されている。
・自分で考える（問いをつくる）→自分にとって重要
　→他者の問いへの気づき（共に考える）
・子どもたちに「問いかけること」を大切にしてきたが、それだけでは不十分。それでは、思考の範囲が狭くなる。子どもたちの中から「問い」が出てくることが大切。それが、主体的な学びになる。　→子どもの主体性を尊重する。

2　アイシンゲル先生と子どもたちの秘密の雑誌

〇強制収容所（テレジン）のハンナとその兄ジョージの体験から、子どもの主体性を尊重することを考える。
・アイシンゲル先生たちは、最後まで子どもたちに学ぶ機会を与えようとしていた。
・突然始まった共同生活、はじめはとても大変な状況だった。
・「自分たちのことは、自分たちで考えて、自分たちでやりなさい。どうしても必要なことは、聴きなさい。」とアイシンゲル先生は言った。
・自治組織（共和国）をつくり、一人一人の役割を自分たちで考えた。
・ある少年の提案：「思いを書き残そう」
　→秘密の雑紙（ヴェデム「我らが導く」）
・ロゴマークの意味：壁の向こうには、未知の素晴らしい世界が広がっている。それに向かって、僕たちは進んでいこう。
　その背景には「本」学ぶということ。
・２年間で、８００ページの雑紙を書いた。
　→戦後、発見されて出版された。
・見返りを求めて良い行いをするわけではない。



3　子どもの権利条約とコルチャック先生（ポーランドの作家、小児科医。孤児院の院長）

〇子どもの自治を尊重する運営方法→自らを律することを大切にした。
・子どもを一人の人間として尊重する。子どもは未来ではなく今を生きている人間だ。
・子どもも過ちを犯す。それは子どもが大人より愚かだからではない。子どもも人間だからだ。
　完全な子などいない。
・コルチャックの思想が、子どもの権利条約に結び付いている。

質問・感想

　講演後、「石岡先生のアウシュヴィッツに対する原動力は？」という質問が出された。それに対し、石岡先生から「遠い歴史を学んでいるようで、身近なことを考える。アウシュヴィッツを介して考えること。子どもたちの発言から気づかされることはとても多い。」との回答があった。さらに石岡先生から、「子どもの柔軟な発想が、新しい学びへの原動力となる」、「ちょっと待つことの大切さ」とのお話があった。

ま と め

・私の気持ちを伝える、あなたの気持ちに耳を傾ける。それが対話。よい問いが生まれれば、対話が始まる。それが子どもたちに育てたい力である。
・既存の社会の枠から飛び越えて、新しいものを創造する力が大切。
・予測不能な時代だからこその、問いづくりの重要性
　→私にできることはあるだろうか？
　→「私はどんな世界を生きたいか。」と問い直してみる。
　　そうすると見えてくるものがある。

岩手県ＰＴＡ研究大会宮古大会　大会役員名簿

大会役職	氏　名	県Ｐ連役職	大会役職	氏　名	県Ｐ連役職
大会会長	山下泰幸	会長	大会委員	河合純子	理事
大会副会長	向井隆	副会長	大会委員	岩城覚	理事
大会副会長	福田育英	副会長	大会委員	和田英	理事
大会副会長	髙橋貴士	副会長	大会委員	久慈孝	理事
大会副会長	小川さつき	副会長	大会委員	佐藤和史	理事
大会副会長	金野貴博	副会長	大会委員	八重樫千晶	理事
大会副会長	昆尚人	副会長	大会委員	齋藤勝	監事
大会副会長	山口真樹	副会長	大会委員	髙橋数馬	監事
大会委員	藏谷幸輔	理事	大会委員	女鹿隆徳	監事
大会委員	佐々木勉	理事	大会委員	渋川誠親	監事
大会委員	鎌田哲暢	理事	大会委員	後藤貴昭	監事
大会委員	阿部雄	理事	大会委員	芳賀光	監事

一般社団法人岩手県ＰＴＡ連合会事務局

事務局長	西郷晃	常務理事	事務局員	佐々木悦子	―
事務局員	後藤員子	―	事務局員	堤温子	―
事務局員	吉田真由美	―	事務局員	伊東千栄子	―

令和5年度　母親委員名簿

一般社団法人岩手県ＰＴＡ連合会

役職	地区名	氏　名	所属単位ＰＴＡ名	備考
委員長	盛岡	山口真樹	盛岡・上田中	
副委員長	紫波	谷村由美	矢巾・矢巾中	
委員	久慈	齊藤育美	久慈・久慈小	
〃	二戸	姉帯麻帆子	二戸・福岡小	
〃	盛岡	赤間妃史	盛岡・北陵中	
〃	岩手	坂本由美子	葛巻・小屋瀬小	
〃	花巻	佐藤淳美	花巻・花巻北中	
〃	和賀	宮原敦子	北上・北上北中	
〃	胆江	那須川雪絵	奥州・真城小	
〃	一関	藤村真弓	一関・室根小	
〃	気仙	佐藤香	陸前高田・高田第一中	
〃	上閉伊	中田貴世江	釜石・甲子中	
〃	宮古	有原由加	宮古・千徳小	

令和５年度　岩手県 PTA 研究大会宮古大会　実行委員名簿

	役職名	氏名	所属ＰＴＡ等
総務部（事務局）	実行委員長	四垂　翔	宮古地区ＰＴＡ連絡協議会長（小川小ＰＴＡ会長）
	実行副委員長	菊地　大	宮古地区ＰＴＡ連絡協議会副会長（田野畑中ＰＴＡ会長）
		坂下　実穂子	宮古地区ＰＴＡ連絡協議会副会長（崎山小ＰＴＡ会長）
		有原　由加	宮古地区ＰＴＡ連絡協議会母親委員長（千徳小ＰＴＡ）
	顧問	木戸脇　大輔	前宮古地区ＰＴＡ連絡協議会長（前山田Ｐ連会長）
		内村　明日美	前宮古地区ＰＴＡ連絡協議会副会長（前岩泉Ｐ連会長）
		浜田　涼	前宮古地区ＰＴＡ連絡協議会副会長（前宮古Ｐ連会長）
		藤井　理夏	前宮古地区母親委員（第二中ＰＴＡ）
	参与	妻田　篤	宮古地区校長会会長（宮古小校長）
		米川　聡	会長所属校校長（小川小校長）
	事務局長	鈴木　恵	会長所属校副校長（小川小副校長）
	事務局次長	根木地　淳	前宮古Ｐ連事務局長（鍬ヶ崎小副校長）
	事務局長補佐	田代　由希	令和４年度宮古地区事務局長（船越小学校副校長）
		千葉　亮子	前田野畑Ｐ連事務局長（田野畑小副校長）
		新井　哲士	宮古Ｐ連事務局長（宮古西中副校長）
		佐藤　知	山田Ｐ連事務局長（山田小副校長）
		鈴木　玲子	田野畑Ｐ連事務局長（田野畑中副校長）
		町畑　光明	岩泉Ｐ連事務局長（釜津田小副校長）
庶務部	会計	新井　哲士	宮古Ｐ連事務局長（宮古西中副校長）
		塩飽　由美子	宮古Ｐ連（新里中副校長）
		滝澤　真貴子	宮古Ｐ連（津軽石小副校長）
研修企画部	部長	松本　憲幸	宮古Ｐ連（磯鶏小ＰＴＡ会長）
	副部長	阿部　智幸	山田Ｐ連（豊間根小ＰＴＡ会長）
		早野　由紀子	岩泉Ｐ連（岩泉小ＰＴＡ会長）
	研修企画部担当	星　健也	宮古Ｐ連（磯鶏小　副校長）
		熊澤　裕樹	山田Ｐ連（豊間根小副校長）
		伊藤　博光	岩泉Ｐ連（岩泉小副校長）
施設運営部	部長	昆　尚人	山田Ｐ連（山田小ＰＴＡ会長）
	副部長	竹花　光人	岩泉Ｐ連（小川中ＰＴＡ会長）
		小笠原　邦夫	宮古Ｐ連（宮古一中ＰＴＡ会長）
	施設運営部担当	佐藤　知	山田Ｐ連（山田小副校長）
		本多　準一郎	岩泉Ｐ連（小川中副校長）
		黒渕　大介	宮古Ｐ連（宮古一中副校長）
広報記録部	部長	澤口　美賀子	岩泉Ｐ連（小本中ＰＴＡ会長）
	副部長	中道　史典	宮古Ｐ連（重茂小ＰＴＡ会長）
		大石　裕治	山田Ｐ連（山田中ＰＴＡ会長）
	広報記録部担当	佐瀬　智洋	岩泉Ｐ連（小本小副校長）
		宅石　忍	岩泉Ｐ連（小本中副校長）
		山口　博文	宮古Ｐ連（重茂小副校長）
		上村　佳邦	山田Ｐ連（山田中副校長）
全体会会場部	部長	四垂　翔	宮古地区ＰＴＡ連絡協議会長（小川小ＰＴＡ会長）
	副部長	菊地　大	宮古地区ＰＴＡ連絡協議会副会長（田野畑中ＰＴＡ会長）
		坂下　実穂子	宮古地区ＰＴＡ連絡協議会副会長（崎山小ＰＴＡ会長）
		木戸脇　大輔	山田Ｐ連（船越小ＰＴＡ会長・前実行委員長）
		浜田　涼	宮古Ｐ連（津軽石小ＰＴＡ会長・前実行副委員長）
	部員	谷地　孝徳	宮古Ｐ連（鍬ケ崎小ＰＴＡ会長）
		佐藤　剛	田野畑Ｐ連（田野畑小ＰＴＡ会長）
		岩間　としえ	宮古Ｐ連（高浜小ＰＴＡ会長）
		飯塚　肇	宮古Ｐ連（田老第一小ＰＴＡ会長）
		澤口　嘉治	宮古Ｐ連（新里小ＰＴＡ会長）
		畏岩　善幸	宮古Ｐ連（川井小ＰＴＡ会長）
		本多　政彦	宮古Ｐ連（第二中ＰＴＡ会長）

		黒沢　良一	宮古Ｐ連（川井中ＰＴＡ会長）
	全体会場部主担当	鈴木　恵	会長所属校副校長（小川小副校長）
	全体会場部担当	根木地　淳	前宮古Ｐ連事務局長（鍬ヶ崎小副校長）
		田代　由希	令和４年度宮古地区事務局長（船越小学校副校長）
		千葉　亮子	前田野畑Ｐ連事務局長（田野畑小副校長）
	アトラクション担当	岩間　徳次郎	宮古Ｐ連（山口小副校長）
		及川　暁	宮古Ｐ連（山口小ＰＴＡ会長）
分科会会場部	第１分科会班長	姉石　誠司	宮古Ｐ連副会長（重茂中ＰＴＡ会長）
	主担当	熊谷　大輔	宮古Ｐ連（花輪小副校長）
	副担当	米田　亜希子	宮古Ｐ連（花輪中副校長）
		平野　美代子	宮古Ｐ連（河南中副校長）
	班員（Ｐ会長）	デイビッド・ベイカー	宮古Ｐ連（花輪小ＰＴＡ会長）
		伊東　英昭	宮古Ｐ連（花輪中ＰＴＡ会長）
		荒川　純子	宮古Ｐ連（河南中ＰＴＡ会長）
		川崎　賢一	宮古Ｐ連（新里中ＰＴＡ会長）
		花輪　政文	宮古Ｐ連（田老第一中ＰＴＡ会長）
	担当（副校長）	竹内　勇	宮古Ｐ連（田老第一小副校長）
		藤尾　佳子	宮古Ｐ連（宮古第二中副校長）
		佐々木　峻	宮古Ｐ連（重茂中副校長）
		早川　貴之	宮古Ｐ連（田老第一中副校長）
		塩飽　由美子	宮古Ｐ連（新里中副校長）
	第２分科会班長	昆　尚人	山田Ｐ連会長（山田小ＰＴＡ会長）
	副班長	阿部　智幸	山田Ｐ連副会長（豊間根小ＰＴＡ会長）
	主担当	佐藤　知	山田Ｐ連事務局長（山田小副校長）
	副担当	熊澤　裕樹	山田Ｐ連理事（豊間根小副校長）
	班員（Ｐ会長）	大石　裕治	山田Ｐ連副会長（山田中ＰＴＡ会長）
	担当（副校長）	上村　佳邦	山田Ｐ連理事（山田中副校長）
	第３分科会班長	林崎　功	岩泉Ｐ連会長（岩泉中ＰＴＡ会長）
	副班長	内村　明日美	前岩泉Ｐ連会長（岩泉小ＰＴＡ副会長）
		鈴木　雅孝	岩泉Ｐ連顧問・岩泉Ｐ連会長所属校校長（岩泉中校長）
	主担当	町畑　光明	岩泉Ｐ連事務局長（釜津田小副校長）
	副担当	鈴木　玲子	田野畑Ｐ連事務局長（田野畑中副校長）
		熊谷　宏志	岩泉Ｐ連（岩泉中副校長）
	班員（Ｐ会長）	佐々木　大樹	岩泉Ｐ連（釜津田小ＰＴＡ会長）
		工藤　洋一	岩泉Ｐ連（有芸小ＰＴＡ会長）
		三浦　泉	岩泉Ｐ連（小本小ＰＴＡ会長）
	第４分科会班長	坂下　実穂子	宮古地区ＰＴＡ連絡協議会副会長（崎山小ＰＴＡ会長）
	副班長	有原　由加	宮古市ＰＴＡ連合会母親委員（千徳小ＰＴＡ）
	主担当	菊池　知之	宮古Ｐ連（千徳小副校長）
	副担当	片桐　啓一	宮古Ｐ連（崎山小副校長）
		板垣　健	宮古Ｐ連（宮古小副校長）
	班員（Ｐ会長）	吉水　清孝	宮古Ｐ連（千徳小ＰＴＡ会長）
		竹原　和彦	宮古Ｐ連（宮古西中ＰＴＡ会長）
		小野寺　康人	宮古Ｐ連（宮古小ＰＴＡ会長）
		岡田　みゆき	宮古Ｐ連（津軽石中ＰＴＡ会長）
		菊池　勝	宮古Ｐ連（崎山中ＰＴＡ会長）
	班員（副校長）	佐々木　文美	宮古Ｐ連（高浜小副校長）
		田村　良利子	宮古Ｐ連（新里小副校長）
		及川　千暁	宮古Ｐ連（川井小副校長）
		古川　泰也	宮古Ｐ連（津軽石小副校長）
		伊勢　寛臣	宮古Ｐ連（崎山中副校長）
会計監査	実行委員会監事	佐々木　大	宮古大会監事（田野畑小ＰＴＡ）
		佐々木　優	宮古大会監事（田老第一中ＰＴＡ）